

## 愛知万博「リレーインタビュー」

写真は読売新聞 1999 年 9 月 6 日朝刊の「試される叡智 2005 年愛知万博リレーインタビュー④」。まだ若かった私は、なんだか目も鋭かった。今からちょうど 20 年前。多くのインタビューのなかでも、記憶に残るものだ。発言を抜粋して紹介したい。

1970 年の大阪万博の時とは時代が違います。財政と環境に負担をかけてイベントで地域を活性化するのではなく、ほかにもっと経済を活性化する方法はあはず。学生に聞いてみても万博には興味を示しません。毎日がイベントのような今、若い人ほど今さら、なぜイベントなのかと感じているようです。

新しいことをやろうというのはよく分かりますが、環境というテーマを後からつけたことによって、逆に矛盾が出てきています。一つは、環境をテーマにするのであれば、なぜ、海上の森の自然に手をつけるのかということ。会場計画も、自然を生かして新しいことをやろうとして逆にお金がかかるようです。

(環境への負荷を軽減するため、愛知青少年公園などが会場に追加)

いい方向になりましたが、依然として海上の森に施設が配置され、森が守れないという点では変わっていません。

県がなぜあの場所にこだわるかと言えば、新住事業（新住宅市街地開発事業）があるからです。新住は必要性、採算性という意味から非常に問題です。今、あの場所に 6 千人居住の住宅が必要か。

大阪万博や東京五輪の時代には国家的イベントをやれば、国からおこぼれの関連事業があったが、時代は大きく変化しました。愛知は時代の変化に対する認識が甘いのでは。東京、大阪という大きな兄貴たちがやってきたことを遅れてやろうとしている。状況を見極め、やめる勇気も必要です。

どうしても開催したいなら、2500 万人という入場者にこだわらず、規模を縮小すべきです。特定の会場に人を呼ぶのではなく、インターネットを使って地域全体を巻き込むなど、従来とは違った発想の国際博にして欲しいのです。

リレーインタビューの次回は、元環境庁長官の岩垂寿喜男さん。国内外の環境団体の抗議、岩垂さんらの「政治力」などもあり、万博会場は海上の森から愛知青少年公園に変更された。あの時の熱気は、今でも忘れられない。

2 度目の大阪万博の会場「夢洲」にとって、愛知万博は貴重な教訓を残している。

(2019 年 5 月 28 日)

